を刳り貫いたソケット内面に漆を塗り断端袋で適合調整をし、足継手は固定式のため特に坂道の昇降は不便であった。

三七・八年戦役松山俘虜収容所を中心に、恩賜義肢交付とその意図を探ってみたい。

（京都大学）

40 大隈重信の義足―その原因と生活―

坪井良子

明治時代の大政治家であり、また早稲田大学の創設者でもある大隈重信は明治二十二年条約改正に反対する暴漢の投げた爆弾によって右脚を負傷し、ついに切断手術を受けることになり、その後義足での生活を余儀なくされた。

本研究では大隈重信の義足生活に至った経緯とその病床生活、義足装着とその後の生活について詳述する。

大隈重信は天保九（一八三八）年二月十六日佐賀藩会所小路に生れ、幼名を八太郎といった。大隈が生まれ成長した時代は、徳川封建制度の崩壊寸前のときであり、日本は開国を迫られ、何もかもが変革の時期であり、まさにわが国未曽有の転換期でもあった。

明治二十一（一八八八）年二月一日伊藤内閣に入閣、同二十二年十月十八日黒田内閣の外務大臣の時、条約改正に反対する来島恒喜の投げた爆弾によって、右脚を負傷し、その後切断手術を受け、義足での生活を余儀なくさせられた。

来島恒喜（一八五九～一八八九）は、福岡出身で国粋主義団体玄洋社に所属していた。外相官邸前で大隈を襲い、重傷を負わせた後、その場で自殺した。

ベルツはこの事件の様子を日記に記している。また、手術に立ち会った日本赤十字社医員高橋種紀はその時の記録を詳細に残している。

事故の際、最初に駆けつけた医師高木兼寛は、すぐに東京慈恵医院看護婦教育所の生徒四名を派遣して看病にあたらせた。その時の様子は大隈綾子夫人の礼状に見る事ができる。大隈は負傷後、経過も順調で隻脚ではあったが義足と杖による社会復帰であった。その後すぐにアメリカA・A・マークス社から義足が送られてきた。しかも毎年改良に改良を加えて送ってきたという。それは「義手足纂論」に、また、大隈重信宛ての一八九五年十二月十二日付けのA・A・マークス氏の手紙の中に見出だす事ができる。それは大隈重信がA・A・マークス社の義足を使用していることに対する感謝文であった。さらに大隈重信使用の義足を、早稲田大学で実見する機会を得た。

大隈重信はアメリカ製造の義足が一番よいといい、それは毎年改良に改良を加え、しかも改良点を充分に説明して送って来るなど親切であるといい、わが国の義足製造は、不親切で不熱心で、未だ徳義心が発達していないといっている。そして、義足はもっと軽く、値段を安くすることに心がけなければならないといっている。当時A・A・マークス社製の義足の値段は大腿切断用―百ドル（二百円）、膝関節離断用―百ドル（二百円）であり、日本製では、大腿切断用―特別製四十五円、普通製三十五円、下腿切断用特別製四十五円、普通製三十五円であった。当時アメリカ製の義足を身に付けることの出来る人は極く限られた階層の人々であったといえる。

大隈は片足を失くしてからは上体をきたえるために運動をし、特に精神の健康には自ら考えた生活五カ条を実

践するなど、健康に留意した。一九二二（大正十一）年一月十一日八十四歳でその生涯を閉じた。

大隈重信は、右脚切断後アメリカのA・A・マークス社製の義足を装着した。以後A・A・マークス社で改良に改良を加えた義足を装着することができた。これらは当時世界で最も進歩した義足であったということができよう。

（慈恵看護専門学校）

41 遠藤培地の創製者・遠藤滋（シゲシ）

土屋重朗

明治後期より昭和戦中・戦後まで使われた、腸チフス菌と大腸菌とを鑑別する「遠藤培地」は、日本人の創製したすぐれた培地として知られている。

遠藤培地が私立伝染病研究所で明治三十六年創製され、同年『細菌学雑誌』に発表されて、追試の結果これに勝る検査法はなく、長い間用いられてきた。そのため遠藤の名はよく知られたが、創製者の遠藤滋（シゲシ）とはどうゆう人か知る人はきわめて少ない。

遠藤培地の発明と原理および使用の歴史などについては『藤野・日本細菌学史』（一九八四）にくわしいが、私は主として遠藤滋の経歴と性格等についてふれてみたい。

遠藤滋は遠藤周民の二男として静岡で明治三年五月九